

■ 書 評

**臨床てんかん next step
知的障害・自閉症・認知症か
ら併発精神障害まで**

Michael R. Trimble, Bettina Schmitz 編

吉野相英 監訳

立澤賢孝, 戸田裕之, 角田智哉 訳

新興医学出版社

2013年12月 248頁

本体価格5,800円＋税

精神科医にとって得意や関心が大きく分かれる領域の1つに「てんかん」が挙げられるだろう。それは脳波の判読と大抵セットになっている。脳波所見を明快に解説し、発作型を的確に診立てる先輩医師を見て、自分もあんな「職人」にいつかはなりたいと憧れたものである。しかし、近年わが国において「てんかん」を診る精神科医は、その数を減らしてきているように思われる。そうした事情は本邦に限ったことではなく、欧米においても同等か、もしくはより精神科医のてんかん離れが顕著であるらしい。

本書は Michael Trimble と Bettina Schmitz の編集による Neuropsychiatry of Epilepsy, Second Edition の全訳であり、てんかんに関わるさまざまな精神医学的問題が取り上げられている。編者はいずれも神経内科医であるが、「てんかんは神経疾患ではあるけれども、てんかん学と精神医学を切り離すことはできない」と、精神科医の現状に対して大いに危機感を抱き本書の執筆につながったところもあるようだ。つまり、「精神科医よ、もっとしっかり自らの責務を果たせ」と神経内科医が叱咤激励しているのだ。訳者らも本邦の現状を憂い、彼らのメッセージに精神科医として応えるべく翻訳の難作業に挑んだに違いない。

本書の章立ては、てんかんと精神障害の分類と疫学にはじまり、てんかに伴う精神症状、てんかんを併発しやすい精神疾患、社会的認知まで言及したてんかんと認知機能に関する話題、さらに薬物療法やてんかん外科治療と精神症状、そして最後に「てんかんと意識」と、てんかんにおける

興味深い精神医学的項目が余さず網羅されている。また、各章とも最新の知見がふんだんに盛り込まれ、ビデオ脳波の開発などにより本領域が再び注目されるようになって然程は経ていないものの、数多くのことが解明されつつあることを知ることができる。一方で、個々の知見の羅列が目立つ箇所もあるが、いずれも章末には「まとめ」が設けてあり整理と理解に役立つよう工夫されている。

精神科医にとって最も興味深い一方でその理解が難しいのが、「てんかに伴う精神症状」であろう。それは発作との時間的關係性に従い発作間欠期精神症状と発作周辺期精神症状に大別され、発作周辺期症状はさらに発作前、発作時、発作後に分けられる。それらの症状の出現時期や持続期間など発作との関連性について十分に知らなければ、一般的なうつ病、不安障害、精神病などと区別がつかず、結果として不正確な診断となったり、単に「てんかん精神病」などと不十分な診立てに留まったりしていることが少なくないであろうと、自戒も込めて思われる。図表も豊富に掲載されており、分類やその理解の助けとなるであろう。

また、てんかんの包括的転帰は発作自体よりも併発する精神障害によって左右されるといわれ、精神科医に最も求められているのは、まさしくてんかん併発精神障害の治療であろうが、発作閾値の低下や抗てんかん薬との相互作用を恐れて、十分に役割を果たしきれてはいなかったとも思われる。それについても、抗てんかん薬と「向精神作用」「自殺」「認知機能障害」や「併発精神障害と向精神薬の使い方」などの各章における詳説は、具体的な指針を示してくれるであろう。新規抗てんかん薬についての知見も盛り沢山である。

本書はてんかんにおける神経学と精神医学の相互協調の重要性を説いており、大いに共感するところである。その一方で、「てんかんは結局精神科医が診る」という先輩医師が折に触れて熱く語る力強い言葉を手放したくない気もする。いずれにしても、私たちを鼓舞し奮起させる書である。

(根本隆洋)